万全の策 ——活動と受動のあいだで——

倉井　香矛哉

仔細な経緯があって、今年の初詣は靖国神社に昇殿参拝することになってしまった。これまでは、みたま祭りに参加したり、神池庭園（註——境内の奥にある日本庭園）で友人と待ち合わせたり、といったかたちで境内に立ち入ることはあったものの、さすがに昇殿参拝だけは避けていた。だが、今回は懇意にしていただいている方からのお誘いということもあって、ついうっかり参加表明してしまった、というのが実情である。

とはいえ、ぼくが神社に参拝することじたいは、少なくとも数年前には珍しいことではなかった。たとえば、大学院進学に向けて初めて東京に滞在したとき、最初に向かったのは明治神宮である。——当時のことは、今でも懐かしく想い起こされる。高校時代にはいわゆる「受験勉強」というものにあまり興味を持てず、ようやく大学院進学にあたって高校生が大学受験に対して抱くような清新な気持ちで大学案内を読んだりして、「とりあえず、まず東京の大学を見てみよう」と思い立ったことから、母と一緒に青山学院、慶應義塾、東京大学をはじめ、せっかく東京まで来たのだからと、国立科学博物館、国会議事堂、皇居前の楠木正成像などを見て廻った。その嚆矢として、明治神宮に参拝したのである。——大学三年生の年の終わりの三月一七日。爾来、自分の研究対象としている新感覚派の作家、横光利一の誕生日でもある。

現在でも、たとえば京都旅行など、歴史的な建築物としての神社仏閣をめぐることは大好きなのだが、そこに参拝することに対して後ろめたさを感じるようになったのは、大学院に進学し、無教会キリスト教の全国集会、内村鑑三とカール・バルトの読書会、青年集会といった場に参加して以後のことである。それまでは、内村に関連する「二つのJ」、「武士道的キリスト教の提唱者」と云ったキーワードへの通説的な解釈を半ば自明視して了っていたこと、また、専門領域の文学研究と並行するかたちで、異文化コミュニケーションにおける共通了解、つまり、この世界を生きる人びとと互いに理解り合うための方途について漠然と考えていたことから、日本思想における神仏習合、和の精神、武士道といったものを広く世界に発信していきたいと考えていたのだ。しかしながら、ことに宗教的な信念の如く、人間の行為や人生選択の根幹の領分にかかわる価値規範については、少なくとも個人の内面においては動かしがたいもの、絶対的なものとして確信されているがゆえに、安易に「理解り合おう、対話しよう」と呼びかけられるようなものではなく、寧ろ、安易に対話を